

『風俗問状答』から考えること

中道 豪一

母の生まれ故郷である神辺の偉人菅茶山。私は若い頃から茶山の漢詩に親しみ、遠い親戚である島谷真三の茶山研究を通してその業績に触れる機会はありましたが、深く意識するようになったのは、備後國福山領の風俗を記した茶山ゆかりの『答問福山管内風俗状五卷』（文化 ㉔ 年～文政 ㉗ 年頃）がきっかけです。

数年前に「正月元日に神社にお参りに行く、いわゆる初詣は明治以降の習慣だ」という言説が流行したことがあります。私は研究者（博士【神道学】）として、「ああ、これは江戸時代の年中行事に関わる基礎文献を読んでいない無責任な戯言なので、すぐに消えるだろう」と思っていました。が、伝統文化の担い手たちの中にも賛意を示す者が現れ、広島でもそうした人々が少なくなかったことに驚きを禁じえませんでした。というのも基礎文献の一つが『風俗御問状答書』であり、そこには「元日の朝に神社へ詣る」ことが記されているからです。

もちろん、これは福山藩だけのことではなく、諸国の各藩が幕府に提出した報告書にも同様のことが記されています。これらの報告書は中山太郎『諸国風俗問状答』や『日本庶民生活史料集成』等にまとめられ現代でも手にすることができますが、あまり読まれていない現実を感じた記憶があります。そしてこの経験から、自分たちの暮らす国の文化・風俗について、丹念に文献を読み解くことなく刺激的な言説を口にする人々を強く意識させられると共に、不勉強が間違った言説を許容し故郷の歴史が塗り替えられてしまう恐ろしさを痛感させられました。

備後の研究者だと村上正名の『福山の民俗一年中行事一』、民俗学者だと宮本常一が広島県の年中行事について執筆した原稿にも『風俗御問状答書』が参考にされていますから、そうした人々により繋がれた知恵のバトンを決して途絶えさせてはいけないと思うのです。その意味で顕彰会が『備後福山領風俗問状答』（現代語訳 平成 ㉔ 年 訳注委員会）を発刊されたのは素晴らしいと思います。

菅茶山というと、その人格・学識・教育力が話題に上り、その学徳が多くの人を潤したことは言うまでもありません。私は一人の研究者、そして神辺に関わる一人の大人として菅茶山に学び、その学徳を伝えていきたいと思っています。